月内に全カートにカートナビを装備。老若男女が楽しめる。
全世代型コースの新時代へ。

塩原カントリークラブは「シニアにも楽しめるコースへ」を合い言葉に、昨年からカートのコース内乗り入れに踏み切り、ほぼ 1 年が経過した。この間、プレーマナーなどカートの利用状況を観察してきたが、後続チームからのボールの打ち込みに近い事例が散見されたが、問題になるような事故や トラブルもなく運用され、メンバー、ビジターともに好評が得られた。コース変身の次の段階として、カートナビの導入が検討されていた。

コース運営に当たる株式会社塩原ゴルフクラブでは、6月中旬から、現在運用しているゴルフカート75台に、カートナビを装備する作業に着手する。通信状況などの調整が済んだカートから運用を開始し、7月から全カートの稼働が実現する。

このナビはグリーンやバンカーなどの配置、グリーンまでの距離などの全体構成のほか、前の組のカートまでの距離が映し出される。また、双方向性の通信機能も持っており、プレー中にキャディーマスター室と連絡も可能で、万が一の緊急事態にも迅速な対応が可能となる。とくに夏場の雷の発生の際のプレー中止、避難の連絡も即対応出来る。

こうした安心・安全上のメリットのほか、ホールアウトごとにスコアを入力すれば、マスター室のサーバーに保存される。コンペの競技中に、グロススコアでの参加者中での順位もわかるため、ゲーム性の楽しみが倍増する。

また、最後の組みがホールアウトすれば、即座に順位のプリントアウトが可能となり、コンペの幹事さんがスコアカード提出の確認などに走り回ることもなくなる。コンペの楽しみが倍加すること請け合いだ。

関東倶楽部対抗競技（男子）県予選で準優勝。 6月の決勝大会へ。

2024年度の関東倶楽部対抗競技大会（男子）の県予選が 5月16日（木）、矢板カントリークラブに17チームが参加して開催され、塩原カントリーチームは準優勝に輝き、6月11日（木）に静岡県・葛城ゴルフクラブで開かれる決勝大会に駒を進めた。
塩カンチームは石井淳二さん、井上雄さん、山口司さん、八板崇さん、相馬義孝さん、河本泰司さん、菊地一郎さんの7選手。Aクラス上位3人、Bクラス上位2人の合計スコア382で那須小川ゴルフクラブとタイスコアだったが、マッチング争いとなり、わずか1ストローク差で優勝は逃した。関東決勝大会での健闘が期待される。

関東倶楽部対抗競技（女子）県予選は11位

2024年度の関東倶楽部対抗競技大会（女子）の県予選が5月23日（木）、塩原カントリークラブ南・北コースの18ホールで、塩カンなどチームなど22チームが参加して開かれた。
芳賀カントリークラブが323で優勝、ニューアンドリュースゴルフクラブジャパンが325で準優勝、唐沢ゴルフ倶楽部が328で3位となり決勝大会に進んだ。決勝大会は6月17日に鶴舞カントリークラブ（千葉県市原市）で開催される。
加藤仁美さん、加藤里奈さん、石井益子さん、中井明美さん、石島尚子さんの塩カンは342で惜しくも11位だった。

国体レガシー・市長杯ダブルスゴルフチャレンジカップ

那須塩原市が国体のゴルフ競技開催のレガシーとして開く、市長杯ダブルスチャレンジカップが6月6日（木）、塩原カントリークラブで開かれた。

2人でチームを編成、ホールごとにいい方のスコアを合算して争う。このコンペでは、成績ねらいのグロスの部とレジャー重視のネットの部に分かれてプレーを展開した。今回が2回目だが、これまでに両部とも25組前後の申し込みがあり、今回は180名が参加した。

このコンペには、県外からの参加も自由で、市内の温泉に宿泊して参加する場合には、補助金も出してスポーツツーリズムとして地域振興の一助になる事もねらっている。同市では、3回目以降の広がりに期待している。

塩原カントリークラブ！攻略編！！【南コース】― 中里 鉄也プロ ―

☆ 南コース 7 番☆

南7番！やや打ち上げの真っ直ぐな長いミドルホール。
1打目はど真ん中にアドレスをとってゆっくり大きくスイングしたい。2打目はグリーン左手前にバンカーがあり左に向きづらく右にアドレスをとりやすい。その為、グリーンセンターにアドレスをとって2打目もゆっくり大きくスイングしたい。右グリーン右手前のバンカーには入れたくない。
グリーンは左奥から傾斜があるので手前からパッティングしたい。外してもグリーン手前からアプローチをしたい。このホールは長いので力を入れたいが逆にゆったり大きくスイング出来れば飛んでいく。
最後の方！スイング出来れば飛距離アップも期待出来る。

那須の小天狗―小針春芳伝 24

井上　安正

那須ゴルフ倶楽部から標高にして五百㍍ほど下がった塩原温泉の入り口に位置して、27ホールの塩原カントリークラブ（那須塩原市）がある。一九六九（昭和四四年）の開場だから、那須からすると親子みたいなゴルフ場だ。古い湯治場だった塩原温泉を活性化させようと、旅館の旦那衆が立ち上がり、下野新聞社や地元有力者の支援で開発された。

このコースで特筆されるべきは、一九七二（昭和47）年の第一回から、一九八八（平成八）年までの二十五回にわたって栃木県オープンが連続開催されたことだ。また、一九七三（昭和四八）年の第八回以来、一九八八（昭和六三）年の第二十三回を除いて、一九九〇（平成二）年の第二十五回まで栃木県知事杯決勝が連続開催されてもいる。優勝者に名を刻んではいないが、小針春芳も何度か招待されて、栃木オープンには出場している。造成段階からここにいて、運営会社である株式会社塩原ゴルフクラブの顧問を務めた高橋良一が忘れられない光景がある。

栃木オープンのスタート前の練習で、小針はキャディーを150ヤード地点に立たせ、7番アイアンを手にした。高いボール、低いボール、フック、フェードボール。すべてキャディーの至近距離に落ち、打ち終わってキャディーは一、二歩を動くだけで、手の届く範囲でボールを回収して終わった。

高橋は「飛ばすだけがいいのではない。コントロールこそが……」と言われているようで、衝撃を受けたという。

塩原カントリークラブは全体がフラットに感じるが、北コースの一番高い地点と南コースの一番低い所では四十㍍ほどの高低差がある。グリーンは小さいうえにおしなべて砲台である。コース全体の高低差と芝目の方向、グリーンそのものの傾斜を組み合わせ、微妙な読みを求められる。上りに見える面をボールが駆け上がるホールもある。小針は塩原カントリークラブについて、「あそこはいいコースだよ。とくに、グリーンがいい。本気の読みを要求されるから」とほめた。

那須ゴルフ倶楽部は文壇ゴルフの例会の場で、多くの小説家、評論家がラウンドを経験したが、塩原は漫画家・那須良輔がメンバーで、クラブ会報に長年にわたって書いたエッセーに挿絵をつけ、その原画が残っている。

栃木オープンにエントリーしていない年にも、小針はよく後輩プロやアマ選手の激励に顔を出した。六十歳を過ぎたころには、スタートと上がりホールで観戦したが、十月なのに「山から降りてくると暑くてかなわん」が口癖だった。ただ、レストランなどで時間待ちをしている時に、一定の距離から会釈をする人はあっても、周りに近寄って話しかける人も少なくなった。

歌謡曲の作曲家として初の文化勲章を受章し、二〇一七（平成二九）年に八十四歳で亡くなった船村徹（本名・福田博郎）。小針と同じ栃木県の出身で、日光に近い船生村（現・塩谷町）の生まれ。「別れの一本杉」「王将」「なみだ船」「兄弟船」矢切りの渡し」「みだれ髪」……。生涯で残した曲は五千曲を下らない。東京で流しをしていた北島三郎をデビューさせるため、生家に住まわせ、農業の手伝をさせながら、歌謡コンテストに出場させ、世に送り出したことが地元で語り継がれている。

ゴルフが好きで一時はシングルの腕前だった。生家近くの山にゴルフ場が造成されるのを知り、造成現場に通い、コース造りのアドバイスをした。今市市（現・日光市）に作曲用のアトリエを構え、

湘南の辻堂に住む家族と離れ、内弟子と生活して作曲活動を続けた。地元で自分の名前を冠したコンペもいくつか開いたが、晩年は始球式の1番ホールでスモークボールを打ってアトリエに戻り、表彰式とパーティーに再び顔を出した。

そのパーティーでは、孤高の人も同然だった。意図しているのではないが、近寄りがたい空気感が漂った。周りの人々にとって“畏敬の人”なのである。近寄りがたいのは、尊敬の裏返しだった。

パーティーの途中で退席することはなく、参加者がいなくなるのを待って、会場のスタッフにお礼の声をかけ、記念写真に納まってから帰った。小針が味わったのも、その道を究めた達人なら宿命のように味わわなければならない寂寥感だったろう。江場が居合わせた時には、彼が小針の無聊をまぎらわす役を務めた。

讃える会

誰が言い出したのかははっきりしないが、「小針先生を讃える会」をやったらどうかという声が、栃木県内のプロから出た。副支配人を受けてもらえなかった那須ゴルフ倶楽部で、賛助会員の称号を贈ることにし、やっと頭を縦にしてもらっていた。その動きを聞いた大島富五郎は、日本プロの時に受けた恩を返すのはこの時しかないと心に決めた。

当時、栃木県内のプロは藤井正五を会長、大島富五郎を副会長に任意団体ではあったが、栃木県プロ会を作っていた。藤井といえば大島が鬼怒川カントリークラブでプロを目指すきっかけを作ってくれた恩師でもある。さらに言えば、藤井は中村寅吉の弟子だったから、大島は孫弟子に当たる。藤井にも異論があるはずはなかった。

大島は昵懇の宇都宮カントリークラブ所属の鈴木四郎プロと一緒に、県内のゴルフ場の支配人会の会長だった塩原カントリークラブの狐塚敏雄支配人を訪ねて協力を頼んだ。狐塚も大賛成でその場で協力を約束してくれた。ゴルフ場のオーナー会、県のゴルフ連盟にも出向いて趣旨を説明し賛同を得て、一九八九（平成元）年にプロ、アマ合わせて百六十人が参加して、那須ゴルフ倶楽部で開催にこぎつけた。

三回目までは秋に開いたが、夏場に傷んだ芝が回復せず、四回目からは五月開催に変更した。芝がほき始め全面ノータッチでラウンドが出来るようになった。年によっては、愛子内親王殿下のお印でもある、白い花びらの五葉ツツジが見事に咲きそろい、「小針カップ」とも呼ばれて十五年間続き、大島は最後まで事務局を勤めた。

三回目だったか、アマチュア筋から「讃える会」とはいかがかという意見が出された。プロ側にすれば「讃える」気持を長く表したかったが、大島らは「小異を捨てて、大同につく」ことを優先し、「囲む会」に変えたことが忘れられない。小針はこの会を始めるにしても、晴れがましい席に出たくないと渋った。とくに、ラウンド後のパーティーでの挨拶をいやがった。大島は「書いたものを読むだけでいいですから」と承知してもらった。小針亡き今も、大島は大恩を返せたという満足感が胸に残っている。

「囲む会」が定着した二〇〇〇（平成一二）年一月、県プロ会は県内のトーナメント、ティーチングプロが、「ゴルフの普及、ゴルフを通じての社会貢献」を目的にした「栃木県プロゴルフ会」として

本格的に組織化された。会長・藤井、副会長・大島のコンビはそのままに、県内随一の戦績を持つ小針に、役員への就任を働きかけた。しかし、小針は那須ゴルフ倶楽部の副支配人の就任を断り続けたように、がんとして首を縦にしなかった。藤井、大島らは県プロ会のみならず、日本プロゴルフ協会の役員にも推挙しようとしたが小針は固辞し続けた。

忘れられぬプロゴルファー

江場友幸のゴルフ工房には、若手のプロゴルファーを中心に、アベレージゴルファーなどからも、順調に注文が入った。しかし、クラブ製作のために知り合いから借りていた作業場が、持ち主のがん死で整理されてしまったから、思い切って、自宅の隣りの工房を建て替える決意をした。ちょうど十年前だった。平屋ではあるが、駐車スペースからゆったりした四段ある階段を上って、小さめの片開きのガラスドアを手前に引き、小さなたたきでクツを脱ぐとそのフロアが事務室を兼ねた応接室、そして小さいドアの向こうが、作業部屋になっている。

応接室の北側の窓辺に、ゴルフバックに入ったり、むき出しだったりして、クラブが立てられている。当然、その中にはドライバーからアイアン、パターまで、「エバモデル」も並んでいる。客と応対する大きな机の奥の棚には小針の写真が飾られている。江場は小針の額を背に、机をはさんで客からの注文を聞く。客にしてみれば、「那須の神様」から見守られているような気分になって緊張感を覚える。

道路から工房の建物正面を見ると、ローマの神殿のようにも、西洋のおとぎ話に出てくる妖精たちの家のようにもイメージできる。江場が自ら設計図を描いたが、周囲の住宅街の中で、目立ち過ぎず、かといって埋没するでもない、そのセンスが心憎い。「EVA GOLF」。大谷石の塀に取り付けられた、黒い大理石に白く書かれた看板の大きさが、威張るでもなく、媚びるでもなく……。そのたたずまいが、訪問者を心地良くしてくれる。

（つづく）

編集後記

東京都知事の椅子に座るのは誰か。七夕知事選はどうやら女の一騎打ちになる公算が強い。三選を目指す小池百合子知事、立憲民主党の蓮ほう（舟へんに方角の方＝作字して下さい）氏である。共に民放のキャスターの経験者だけあって、白熱の闘いになるのは間違いない。

あの事業仕分けで、「二番ではいけないのでしょうか」と政役人を追及した舌鋒は印象深い。現職都知事の敗戦は前例がないが、カイロ大卒の経歴偽造の指摘もあり、小池知事は背水の陣となるに違いない。浮動票、裏金疑惑の自民党票がどう動くか。暑い夏がすぐ目の前だが、いつになく激烈な選挙戦の後の七夕祭りとなりそうだ。

井上安正